

拾九

S  
100



Handwritten Chinese characters in vertical columns. The characters are written in a cursive style and are difficult to decipher due to the paper's texture and some fading. The visible characters include:

子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子





浮世風呂大意



熟じやく監かんるるにに錢湯せんとうをを捷徑ちやくていのの教諭きょうゆなるなるををななるる。其その故ゆゑ如何いかんと

ななららばば賢愚けんご邪正じやくせい貧福ひんふく貴賤きせん湯と浴あびんんとと裸形はだかかたち小なるこなるハハ天地てんち

自然しぜん乃なほ道理どうり釋迦しやくぢやをを孔子こうしとと於お三さんもも助すけもも産小うまととままくく此こゝ谷や也なり

惜おぼいい欲よくいいもも西さいのの海うみささららりりとと無欲むよくのの形かたちなりなり。欲よく垢あかとと梵ぼん惱なんとと洗せん清せいめ

てて淨湯じやくとうとと浴あびととババ。且かつ那なささららぬぬ折助せすけもも孰たしかがが孰たしかやや一いっ般ぱん裸体はだか。是こゝ乃なりち

生なまれれるる時ときのの産湯うぶゆささららぬぬ死しのの時ときのの葬ゆめい灌かん中ちゆう。世よのの小紅顔せうこうげん乃なり醉客さいかく也なり

朝湯あさゆ小醒こさめ的てきとななりるるがが如ごとくく。生死せいじ一重いっじゆうがが嗚呼あゝままああららぬぬ哉やとといいふふ

朝湯あさゆ小醒こさめ的てきとななりるるがが如ごとくく。生死せいじ一重いっじゆうがが嗚呼あゝままああららぬぬ哉やとといいふふ

佛嫌の老人を風呂へ入れば吾も念佛とまじし色好の壯夫も

裸小なるが前とおさるく己う恥と知り猛き武士は頸う湯と

かけられても人込下やと堪忍とまのり目小入とぬ鬼神と隻腕小離

ころ侠客も御免なまふと石榴口屈むと銭湯の徳をうむとや心

あふ人小私あまじむ心あま湯小私を。譬へ人密小湯の中あく

撒豆ともれが湯々ぶくくと鳴く忽ち泡と浮と出と嘗聞敷

の舟乃矢二郎ハあま湯の舟は人く。湯はあましくと恥

かまや。惣く銭湯より五常は道あり。湯と以く身と温め

垢あかを落おちし病やまひを治ぢし草くさ臥ふしと休やすむるたゞただひ則すなはち仁になり。桶おけのお明あき々  
 ござうござうませぬると他いとの桶おけ手てをかけむ。留とど桶おけと我わが俵はたけ小こはらうはらう。又また  
 急いそいで明あて貸かきたゞただひ則すなはち義ぎ之の田た舎しゃ者ものががじじの冷ひや物ものでござございいは免めんふ  
 ささいいのの成なりららお早はやい。お先まてて演あづづ成なりお静しず小こお寛あろろががどどいい  
 るるががひ則すなはち禮らいなり。糠ぬか洗せん粉こな輕かろ石いし絲いと瓜うり皮かわ小こて垢あかと落おちし。石いし子こで毛け  
 と切きららござござひ則すなはち智ちくああききののととくく水みづととぬぬるるとと之の湯ゆととぬぬるる。  
 お互たがひふ背せ後ごととかかががああふたたががひ則すなはち信しん之のかかははめめとときき錢せん湯たうががれ  
 此こ浴よくととるる人ひとぐぐも。水みづ舟ふねの外ほか陸りく湯たうの桶おけ方かた圓まるの器うつわ小こ隨したがふ道みち理り

と悟さとしり。湯屋ゆやの流ながし返かへす。己おの心こころと常つね小磨こまき。諸あまの垢あか  
 とたひふ。人間にんげん一生いっせい五十年ごじゅうねん。二度にど入いれ。後あと方かたあつとも。後あと一人ひとり前まへ乃なり  
 分別ぶんべつあつとも。湯屋ゆやの張はり札しやく如ごとく。一心いっしん足たぬ。萬能まんのう膏こうあり。馬鹿ばか  
 に附つる薬くすりハあつとも。走馬そうま乃なり千里せんり膏こう。鞭打むちうちと吳水ごすい交まじの無な二  
 膏こうあり。口中こうちゆう散さんと翻ひる其その忠孝ちゆうかう一切いっけつの妙藥めうやく。二親にしんの安神散あんじんさん  
 兎角うしつかく梵腦ぼんなん乃なり火ひの用心いしんハ湯屋ゆやの定書じやうしよに似にたり。心こころ小驕奢せうせうの風かぜ  
 立たハ家私しやひハ何時いづれも。早仕はやし葬まう之の五倫ごりん五休ごきゆうハ天地てんちより預物あづかりもの  
 かんバ。大切たいせう乃なり品しんと持も持も恭物こうぶつあり。瓜色うりいろと酒さけ系けい魂たまひ乃なり失物しつぶつ

不存我（まじ）。招（まね）く禍（わざ）ハ他人（たにん）の一切存不申（いっけつぞんふしん）。夏（なつ）なり。名聞利欲（なもんりよく）

の喧嘩（けんか）口論（くろん）。喜怒哀樂（きどあいらく）乃（な）高聲（たうせい）法（ぽう）無用（むいう）。此文言（こぶんごん）と（と）あり。取（と）

時（とき）ハ任舞湯（にまゆ）小入（せうに）損（しん）ひ。モウ（もう）扱（あ）ま（ま）。後（ご）悔（かい）手巾（てぬぐい）と咬（く）

も（も）益（えき）なり。ふづく世（よ）の中（なか）ハ人心（にんしん）も（も）銭湯（せんとう）の虱（し）小等（せうとう）く。善惡（ぜんあく）

小移（せうし）と易（やす）き物（もの）ナ（な）ハ（は）權兵衛（ごんべゑ）が褻褻（せせ）。ハ兵衛（べゑ）が羽（は）二重（にじゆう）

り移（うつ）り。田婢（でんべい）の湯具（ゆぐ）。今室（いまむろ）ハ絹布（きぬふ）へも移（うつ）は（は）き（き）の（の）乃（な）纏（まと）

絆（は）一（いつ）枚（まい）ハ疊（たたま）乃（な）上（かみ）へ脱（ぬ）。く（く）の（の）重（かさ）着（き）ハ糊（か）の上（かみ）へ脱（ぬ）。小等（せうとう）く。

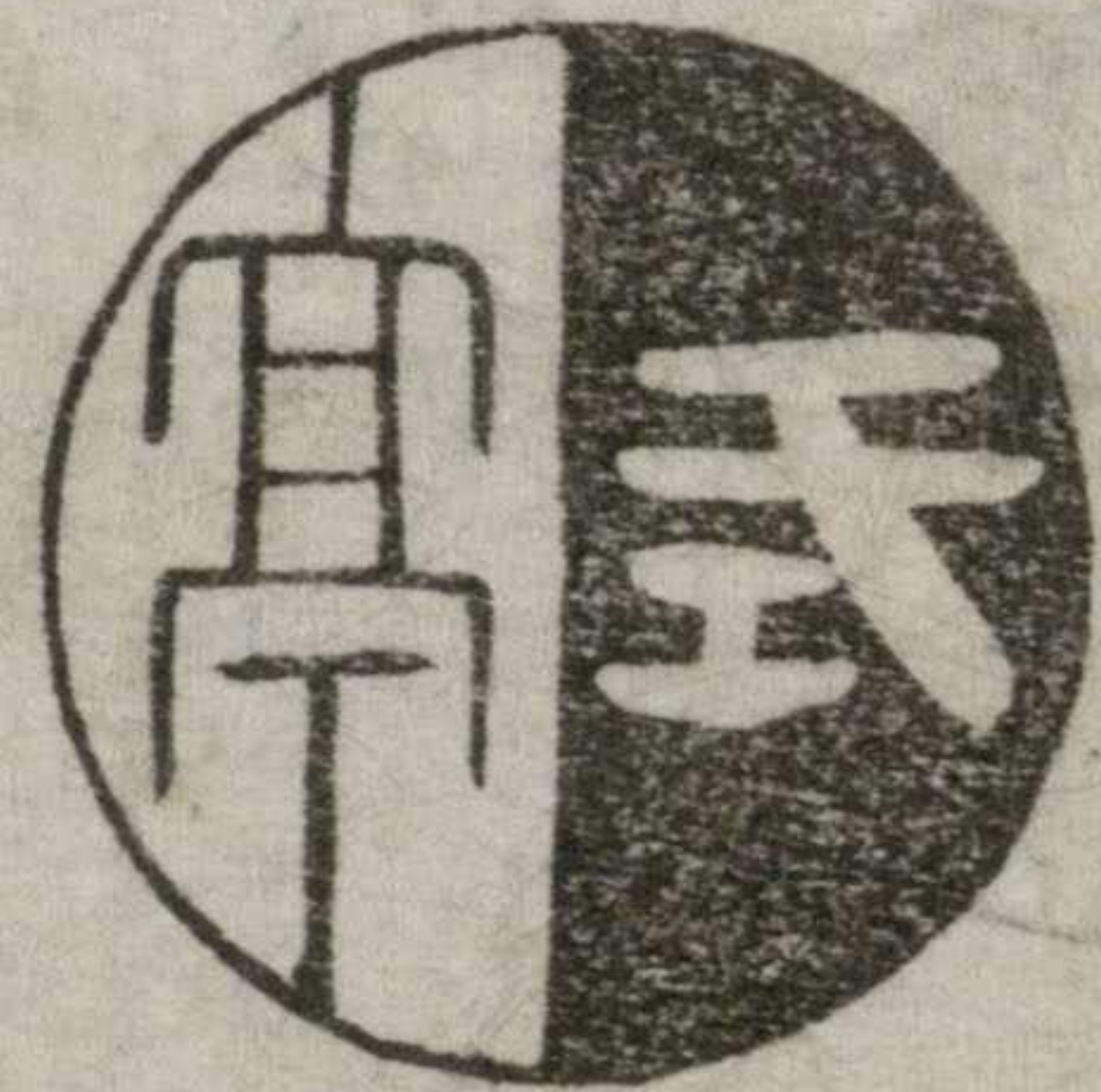
高貴（かうき）貧賤（ひんけん）ハ天（あま）ふあり。善惡（ぜんあく）邪正（じやせい）ハ己（おのれ）が招（まね）く所（ところ）。此意味（こゝの意味）

とくくと悟らば他の異見と朝湯の如く己が身小深うさじ  
唯一生乃用心ハ。軀と借切れ戸棚に納め。魂小錠とちりし  
六情と獲違ふぬやうに堅く相守可申度と。神儒佛の  
組合行夏が牡丹餅の判と居くまらひふ  
維時文化六年己の春は蕨市小せをやと。辰の重九小毫  
と起し例の急案。后乃觀月の芋と食く。尻のじりき  
小冊成は



石町の寓居に於りて

式亭三馬戲題



加万齋管卷六醉書



浮世風呂

二編 女湯之巻 出来  
 三編 女湯之巻 出来  
 四編 男湯之巻 出来  
 五編 来午春 岡本  
 六編 七編 男湯之巻  
 女湯之巻 追々 新作仕  
 込 来 以後 下 空

九例

第の二に  
白圈とら  
はあまが  
アがまが  
まがまが  
の湯を  
く

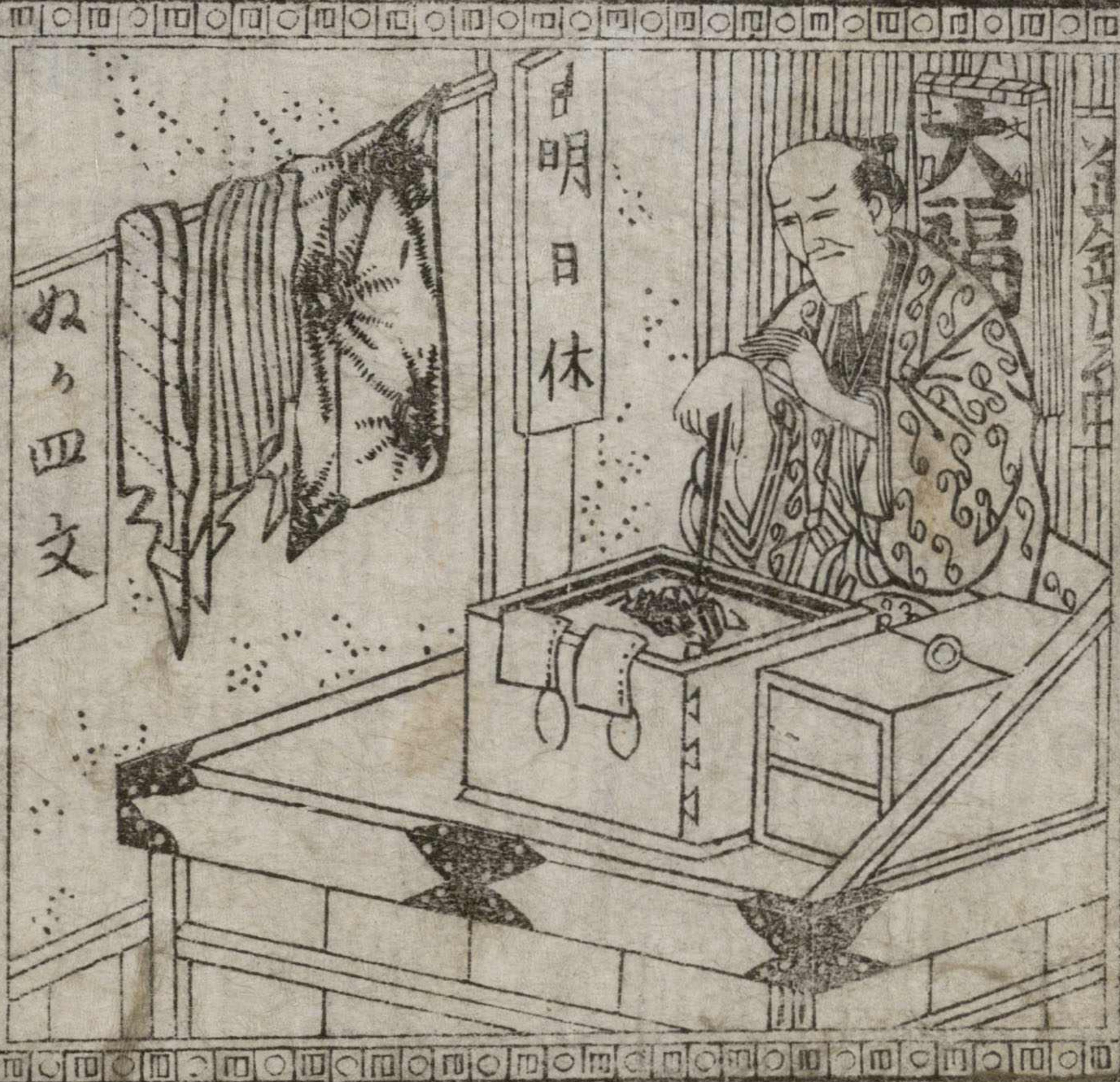


定後二冊女湯  
秋尚  
月日  
上



一夕歌川豊國乃やうき  
 三笑亭可樂う落結とて  
 く侯の能きよく人情小通  
 トと母しきたるべき物ほ  
 惜風其詠向僅小十が  
 と速く傍小書輝あつと  
 吾もあつと感笑一と  
 持りが忽ら例の欲獲  
 此後湯の信小のさ柳巷  
 花街の更と省さく俗の  
 ねおとと増補せよとて  
 則需索とく編二冊  
 まづ男湯の部とてらむ

楊梅結毒休來浴



酒醉年老没入堂

譚話浮世風呂前編 卷之上

江戸 式亭三馬 戯編

五日の風静まりあつちやう早仕舞の牌と出さと十日の雨あつちやう静まり  
 傘の柄かたがきとも出さと月並つぎの休日やすみ静しず禿かぶめてて賢けんと思おも惑まどるるも  
 貴き然ぜんおおののくく恩澤おんたく水浴みづよくと教おしへへんん公こう今いま日ひ煤湯すすぎ火か沐すすぐぐ五  
 塵ちん乃なり垢あかと落おちしし明日あした貴湯きとうぬぬ入いるる六む欲よくの皮かわとと磨こぎぎつつるるも  
 初湯はつとうの公地こうち染そるるハハガガふふも朝湯あさとうの入い加減かへん鳴な呼こけけ徳とく搦なぶぶ  
 いいそそんん噴ふききありありががこころろ風かぜ這こ首くびめめななぶぶくくよよのの僧そうおおれれがが儀ぎ首くび

こぶうく 俗あり。夕口クとこぶう 於男ありバ 湯屋ヤ 刻イ  
こぶう 女あり。薬店の小二ニ 現金湯と洒落れ 讀よ 儒者の塾生シ  
かろ 及く 忍冬湯と 得る 續易く 解難この 類なる 女湯ニ  
かぶ 乃湯身 小箒以 陸其 湯汲は 男滑 川を 探さ 御宣  
かえ 人前拾文の孔方と 青砥を 憤む 後子供 危ハ 文巾供 舟  
あ 十六羅漢偏 祖右 肩の 湯上 以に 浴衣容 乃か 不よ ちあ るい 也も  
あ 當時の 師直 々ふ 女湯と 現う 汲男 湯孤 ありふ 女湯必 之隣 小  
あ わり亭 主の 賓頭 盧そ 者を 面氏 搦る 糠袋 何も ないま

拍子ひょうし本もととぐとぐ函桶はつおけととまるまるけけ斜しやめめ女湯にょとうととるるりりてて真膏まこう薬やくのの流ながるる  
 ととちちらら祿ろくどど男おとこ女め風かぜ風かぜ同どうががううせせどど夫うしよ婦ふ別べつのの疾やまひをを持もつつやや女にょ房ぼうのの  
 光明くわうめい皇こう后こう女にょ湯とうのの番ばん頭だうふふろろ於お消しょう炭たん乃の火ひ持もれれのの油あぶらとと揉もり  
 貸かしし手て中ちゆうのの帯おびのの毛けををむむれれどど却かえりてて極ごく老らう人にんああししきき病びやう人にん所しよののいいざざらら  
 阿あ闍しやく佛ぶつのの化け益やくののああららぶぶはは千せん手て親しん音おん乃の上じやう這えんののああららぶぶはは洗せん  
 務このの袋ふくろををふふんんくくとと匂におひひくく下げ男おとこはは鼻はな疾やまひららががらら風ふうのの壁かべののいい  
 くくとと抄しやう入いるる湯とう汲ひけけ睡すいとと寤ごううしし或あるちちぎぎるるああくくとと啼なむむ或あるはは  
 ががややくくとと騒さわぎぎああららいいとといいづづぬぬるるいいととききひひららららとといいづづららぬぬるる

と喧くうらやぞよめたけに風呂ふうろの弁あや志んやうとてまかへんせ枕丹まくらにお灸

ううらやえうらやばうらや六うらや法うらやどうらや振うらやこうらやじうらや裸うらや俵うらやありうらやノうらやリうらや地うらやふうらやたうらやううらやとうらやくうらや角うらや力うらやのうらや腹うらやと

語うらやもうらやばうらや王うらや俵うらや入うらや乃うらや身うらやどうらや出うらやるうらやありうらや。寢うらやふうらやありうらやとうらやとうらやどうらやありうらや。名うらや指うらや

口の冷物ひえものううらやらうらやひうらや声うらやにうらやあうらやらうらやれうらやをうらや程うらやふうらや是うらやハうらや又うらや馬うらやどうらややうらやくうらやとうらやりうらやようらや人うらや

思うらやひうらやのうらや外うらや立うらや派うらやぬうらやあうらやらうらや次うらやハうらやイうらや出うらやまうらやとうらや子うらや供うらやくうらやハうらや江うらや戸うらや節うらやとうらや喊うらやるうらや

爺うらやとうらやぬうらやみうらやくうらやりうらやもうらや長うらや湯うらやのうらや名うらや氏うらやあうらやらうらや。也うらや免うらやなうらやとうらや田うらや人うらや着うらやるうらやハうらや

りうらやもうらやとうらや好うらやのうらや江うらや戸うらや子うらやあうらやらうらやとうらや一うらや風うらや呂うらやまうらや中うらやとうらや濡うらやとうらやとのうらやとうらやとうらや。

それうらやがうらや長うらや湯うらやもうらや短うらや湯うらやもうらやあうらやらうらやとうらや八うらや面うらやをうらや乃うらや掾うらやのうらやしうらやとうらや松うらや坂うらやをうらや頭うらや



の向声むかしらるる。右向みぎむかひの新あらたなりめく。もろく。短みづかく。俣まあしぬちよふを  
 黄色きいろなるまろく。上うへ節ふしハサイ子こ五ご乃の合あひの手てあり。あやんまを。おや仏ぶつ  
 と咬くはまぬれば。法はふ蓮れん陀だ佛ぶつと吐はき出でとあり。ちやくんと。腮さいでらる  
 が。う。う。えと。鼻はなぬき。ふ。引ひく。是こゝハ唐山たんざんか。結むす金山きんざんの。禁かぎ  
 と。吾われ々々。名な言こと。相あひま滿まん声せい。あ。ま。所ところ。押おしく。咳せきく。の。ま。バ  
 尻しつと。た。ら。く。脛すねも。あ。り。行ゆ。足あし。あ。げ。く。楓かへも。も。め。其その踏ふみも。ど  
 う。と。ど。あ。も。め。り。居ゐ。ら。と。ま。ら。と。ま。中なか。小こ。庭にわ。で。ま。り  
 ほ。ろ。の。口くち。三さん。後ご。ハ。湯ゆ。舟ふね。の。隈かた。小こ。庭にわ。居ゐ。る。風かぜ。ま。り。様さま。の。威い。れ。口くち。

神祇釋教慮無常しんぎしやうしやうしゆの浮世うきよ風俗ふうぶく所ところを  
 づくと定さだむと時とき候くわうハ九月くぐわつあつきの頃ころ錢湯せんとう天あま明あきく  
 しまご店みせ氏うぢ用もち候くわう。



□ 朝あさ湯ゆ乃の光あかり景さま

朝あさ湯ゆ乃の光あかり景さま  
しやうハ錢湯せんとうの肴さかな極くわく小こ矢やの  
かたを本もとめくはくハ門かどの  
くわ印いんと志しさう弓ゆみ射やとしふ  
をあつてししし法はふささ徳とくささしし小  
まくくんん及およびびぬぬ今いまもも是こゝをを境さかいと  
も那なららぬぬ所ところあり

▲ 候あけのらむ  
かアノクニ  
▲ どのとま  
ちろくと納豆引  
▲ 定むの  
カチン

け幕あきふ出方りの二十あまりの男秘またのまの細ちびあして下ま入下  
アノきさのみのをこめて下鼓の葉のかくく木ど襦を引ぎり油で煮深と申うある  
むやぐひをわぐぢきくだちてと能くけ。子のひく人志不をのせそ衣のゆびを  
を伝こどもごまぐら。虫の這ふやふあ由と申する燈ふらふまくとら子病の人

マまはご明秘咽秘咽秘ろああひく秘る秘や深とせ

トハくぐとをひひつて戸果  
をようて区にをるれみき声  
ちくをんぎんく  
起秘うくお古起秘

けつをく焼痕まじり  
程ひてちせんさるおあぐや  
おあぐや

ひらごコココをんらん  
ママママクククク  
マ

トをえふ秘てあ  
のねみむくひ  
てあらく  
てまき  
只中らるるちちと秘とく  
これ



あり終入り。朝あさ穴あな寐ねるやうらうらうとせし人ひとをほけしはし  
 竹たけ時ときごとく思おもふモウ納おつ豆まめ賣うりへ出で直ちかして金かね時ときを賣うり  
 小こ来きく時ときかどアトレ千ち枝えを見みせる紅かみを付つて化粧けしやん  
 をしてベシべしの業わざ晒さらせし人ひとが不ふくうあげて来きマア  
 がるて▲よせ。癩かをのふる男おとこるう持もて見みや兄あまが遠ちか  
 ハア・遠ちかふ方かたもどア目め鼻はなが支たけやアワわびあす  
 とふ面おもてどううかなぐらう揚あ銭げをとりさうどア

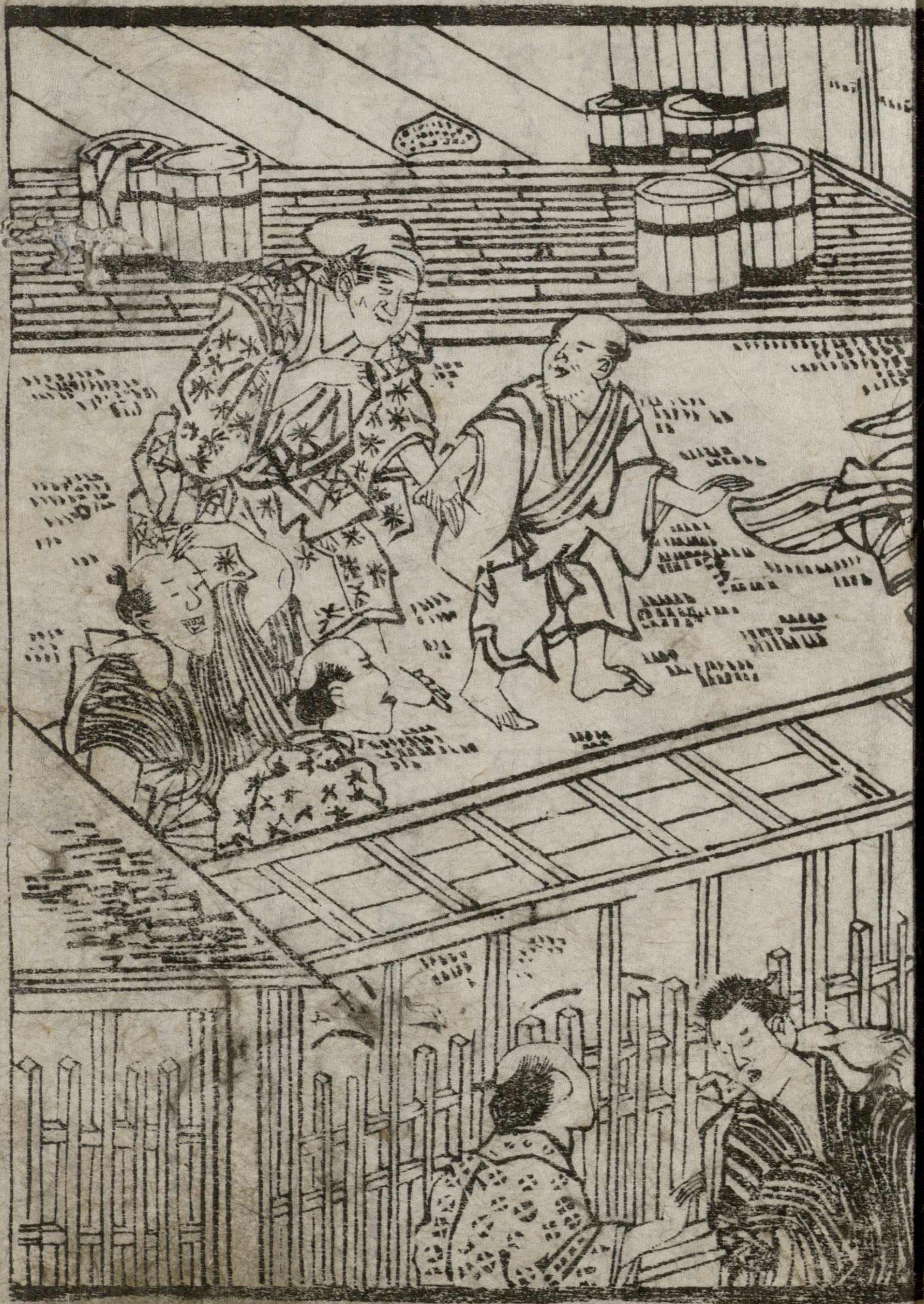


七

五

四

男湯







足もや大丈夫といけるも本所の伯母さん伯母さんの方へ火火

火火だつこかけてるア。働アくおもつぬ働ア。伯母

さん言の伯母さん言ア。行云て言ア。一王ア大丈夫だ

て大丈夫だつてまぢるア。讃岐の金毘羅様ア。金毘

羅様アお礼参お行行行行行迎▲堀の内さるを信心

さるしまごくちんとらうア。終久あぶ終久のんご

のらるるあえのこふらさるるあがてくたてちん

だち。ちん終久まよくくさるるあで由こく

南無妙法蓮華經

三ノ百ノ



侍ふあるのう二両刀どアく。たま終入く。三。足ハハ通大

大丈夫どアく。トどぶ板の上でうつくはる。目をニツニツふとまわりのゆういふ。湯盆の戸を内よりあきく。とせんふよろしくとせ。大戸へき

かろういぶかごまうきく。ア。あぶ終入く。湯盆のたんとうきりをつぶ。してとびあう。アとりのうとも

おだちあまをいけ内よりあふむけおまうる。何どこと何本もけぐる。あまさん

終入く。支えさる。ふらちの下うらうらうん。ア。ア

なな何大丈夫どく。イヒイヒ。トまけのうのあが。どま

もお早うござうま。アイ。どうしておふ朝。このアイ

ゆるぐ夜を更し。ま。怪いせ番頭。俄へでも行



八事のハ七十ハウウのらんまよ。並ぶきん紙子のそでずりかあり。十二のであちよいん。残のせそてまよまがう。らまむぐくまがう。一ハ隱居さん。

今日ハお早うござうまよ。一ハさうどや番頭どの。だるぶ寒く

あつこの「ハイ」そろく加減が遠てまありまよ。一ハ「イヤ」遠と假

でらるへ。コレ鶴吉よ。履物を用心し。うう。トはあがう。このつじまのまよ。ざんをえまがう。まをえまがう。

マゆべハ麻そびれてこまあり切そ。それハ犬めが。マるのこく。

いとふるるが。ゆめぶわど犬の吠と晩ハ。えぬ。それううまが。

ちゆんと支度して布園の上ハ。まよ。たがと紙をううく

のんでまがう。考てわこ。不が。こて。麻られぬ。さう。でも

ちの内の用心をえやうと思つて千燭を<sup>てちう</sup>持て表裏をえ  
らぶ。別多<sup>べた</sup>もさう。又の<sup>とこ</sup>床へ這入<sup>えり</sup>こが。イマ若<sup>わ</sup>い者<sup>もの</sup>といふ  
りの<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>毎<sup>毎</sup>の<sup>の</sup>ご<sup>ご</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>起<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>家内<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>て  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>こ<sup>こ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup>由<sup>ゆ</sup>  
断<sup>だん</sup>へ<sup>へ</sup>ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>て<sup>て</sup>。コレ<sup>コレ</sup>は<sup>は</sup>び<sup>び</sup>ん<sup>ん</sup>助<sup>すけ</sup>の<sup>の</sup>早<sup>はや</sup>う<sup>う</sup>この<sup>この</sup>不<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>隠<sup>かく</sup>居<sup>ゐ</sup>え  
お<sup>お</sup>早<sup>はや</sup>う<sup>う</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>う<sup>う</sup>づ<sup>づ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>震<sup>しん</sup>へ<sup>へ</sup>何<sup>なん</sup>時<sup>とき</sup>で<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>「<sup>レ</sup>それ<sup>レ</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>」  
あ<sup>あ</sup>づ<sup>づ</sup>く<sup>く</sup>して<sup>して</sup>七<sup>しち</sup>ツ<sup>ツ</sup>ガ<sup>ガ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>。ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>半<sup>はん</sup>あ<sup>あ</sup>ご<sup>ご</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>。九<sup>く</sup>ハ<sup>ハ</sup>病<sup>びやう</sup>ひ<sup>ひ</sup>。五<sup>ご</sup>七<sup>しち</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>雨<sup>あめ</sup>。四<sup>し</sup>ツ<sup>ツ</sup>ひ<sup>ひ</sup>で<sup>で</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>「<sup>レ</sup>七<sup>しち</sup>ツ<sup>ツ</sup>金<sup>かね</sup>と<sup>と</sup>ご<sup>ご</sup>五<sup>ご</sup>水<sup>みづ</sup>ア<sup>ア</sup>ら<sup>ら</sup>中<sup>ちゆう</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>「<sup>レ</sup>不<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>く

六八むはちちむぶむ風かぜとあるべしべしちむちむんんふふささううづづららけけ魂たまのの哥うた

とあるちげたた遠とほくく道理道理で風かぜ吹ふひひののささややららなな公こう持ぢごご一いちイイママササ吹ふく

風かぜのの変へとと一いちホホイイ又また遠とほくく私わたくしハハ又また九くガガ病ぢまひとあるあるううらら六む八はちもも風かぜをを

ひひくくざざららううととろろろろここララッットトおおああぶぶちちままううトトフフズズ▲▲これこれううらら進しんくく一いち林りん証しやう

散さんららままろろ齒は磨ぎ口くち中ちゆう一いち切きををいいここささんん一いちああささアアととむむつつここささんん給たま

むむつつここささんん一いちひひくく不ふ金きん山さん寺ぢやう猪しゆ油ゆののりりらら一いち葉は漬ぢけたたまま一いち漬ぢけ

南なん蠻ばん漬ぢけああぢぢけけののりりららととざざらら一いち用ようののりりらら一いち伊い勢せ屋やハハ

ままうう一いち用ようののりりらら能のう成じやう用ようののりりらら能のう徳とく利りののかか明めいへへととざざらら一いちまませせんんららなな

のびまをさくがうちの

「さむあまごぶくまむあまごぶ。ボクもさむ。果わけませうとある

あまもさぶくさく。今日の内志の先祖代々一切の諸精霊

證大菩提のさちるまむあまごぶくさく。ボクもさむ。びくふあさうがれ

終「ナリ」ナリ「進ませまそう「アイもあうがさう。あかんまもさむ

ぶ。あかんまもさむ。西光さんおまへの頭巾へいんもあうあさ

らしくあさうさむごうが目のかきんごせくらの「ナニサ

去年のさ十夜小徳願寺さる人か通夜をささう

私が傍ふらんと落てあさこのさ主がさ色移くさ



ほくろそ持のふ持阿中アかつらくるまらころろろのの小裁小ををめめららけ

ねえねえ拵拵ううくくととああるるここ不不これこれがが信心信心のの徳徳ととややままののうう妙妙清清

さんさんへへああんん不不それそれががおお如来如来ささるるののおお授授どどららううよよののやや西西光光ええ

ままくくああかかむむああももぞぞららぶぶくくおおニニククろろのの萬萬屋屋ささるるのの日日ごとごと

粟粟アア叶叶屋屋のの方方ううららららいいうううう阿阿腰腰がが痛痛へへ千千沙沙ををトトはは多多分分ははろろ

ををららりりととここ坊坊ししららままだだももららふふ稻稻荷荷やや福福のの神神ツツアイアイ和和尚尚おお久久ざざうう

朝朝坊坊主主丸丸ままううけけつつ出出後後くく坊坊ささううららららいいぎぎととおおららんん後後ををまま

けけごごアアアイアイ一一文文アイアイ和和尚尚二二人人一一文文出出後後くく坊坊出出後後くく坊坊ウウトトととままははぬぬままははるる

桶おけをも持もて  
四十よじゅう余あまりの男おとこ六むつつ太たろろの男おとこの子このこめめをもつつ徳とくままりりのの中ちゆうふふせせま  
ととままりりゆゆく  
久く賀が一いちムむ三さんつつ太たろろの女おんなの子こ作しやくどどととららををももつつおおああままのの桶おけく

中ちゆうののかかちちのの子こををののせせて  
ままののうういいららももびび中ちゆううういいよよいいよよアアそそろろややくく来きいいぞぞおおああららいい

どどいいぞぞ見みええさんさんアアこころろびびななさんさんままよよ能よくく下したををささんんてておおああららいいよよ

アアよよいいよよアアおおああららいいららももびびななさんさんままよよ能よくく下したををささんんてておおああららいいよよ

ととんんぶぶららううままささららいいららももびびななさんさんままよよ能よくく下したををささんんてておおああららいいよよ

踏ふままううとと志しここよよ坊ぼううハハおおととららさんさんおおああららいいららももびびななさんさんままよよ能よのの坊ぼううをを

司しふふ坊ぼううハハちち中ちゆうんんおおああららいいららももびびななさんさんままよよ能よのの坊ぼううをを

待まちととららいいららももびびななさんさんままよよ能よのの坊ぼううをを

待まちととららいいららももびびななさんさんままよよ能よのの坊ぼううをを

衣あはへちち申まをんが脱ぬせる。ソソリヤリヤ半はんをを抜ぬき「ああののくくんんモウモウ衣あはをを脱ぬ

ごまごまののくく千次せんじ島しまああめめいいああそそいいととトトちちいいままいい子こののああごごのの下したをを

ががそそココババああぢぢああううけけららささくくココババ兄あにさんさんののああいい似に指さしががああるるがが半はん雀すずめ

さんさんののいい移うつりりののココババ雀すずめののああいい落おちちまますすここへへ福ふく助すけさんさん叔おじ此こゝ

日ひ和わのの能よくく續つくく更まででごござざりりままささとと終はつつささぢぢああううささ是これぢぢららアア

豊あゆ年ねんででごござざりりままささとと一いささぢぢああううささ。ササアア這はいいまませせうう。ここれれくく兄にいさんさんままささ

アアととままさんさんなな半はん雀すずめさんさんいいちち持も遊あそをを落おちちままいいぞぞアアよよいいとととととと

福ふく助すけさんさんモウモウ是これぢぢららアア納おまららわわ子こがが出で来きままちちららアアととぢぢららアアととぢぢららアア

能のりをのりののり〜のりア 能のり苦くささららくくぢぢららア 終はつへへりりヤ ありありままくくア

子供こどもででござごららいいくくト ござごらら口くちへへアアニニススのの兄あにさんさんののままののととどどくく不ふ然ぜん

あありりままりりヤ だだぶぶくくささくくア 能のりののそそくく温あつでで能のりぞぞ是こゝのの金きん兵へい清せい

さんさん子供こどもええああハハチチト ありありををりり物ものででござごららいいまませせららハハイイ徳とく藏ざう

さんさんままののふふハハ何なにももくくああ出いるるままととららここ大だい多たのの機き嫌きらららけけアア

王子おうじへへめめまま〜〜アア海うみ老らう屋おくのの扇あふぎ屋やのの子こハハ夫おとこををりりででままららぶぶ

能のりのの子こ田でん圃ぼ通つうをを接せつまま〜〜例れいのの今いま口くち巴ぱ屋おくのの子こ〜〜ととららぶぶ

おお留りゅうハハささららままああららてて〜〜チチト 上あがりりてて上あがりり子こ供どもととららぶぶ

者への執への湯で懲らせると湯嬬のふあるのり。トシタトト  
トシタトト

返湯をかかまりき。時ハ逆樽の浄瑠璃を誦る人が能い。オカク  
トシタトト

皆さあを終まさと。マツマシトト。是ハありがごとく。トシタトト  
トシタトト

多這入まきよ。兄さん早く這入ま。おとら。さんまご執へのり。或  
トシタトト

或あるいゝが。あるのり。おぢさん。折角うめそ。呉ハ。雀ハ  
トシタトト

強いのり。コリマ。這入ま。鐵砲の方までゆるく。ちんこ。モウ  
トシタトト

トシク。雀ハ強いのり。おとら。さん。おのりも強いのり。コシ見な  
トシタトト

這入ま。おとら。さん。午桶でだぶくを汲で。面百ぞく  
トシタトト

マヤ・亀カメの子こがあつたよ。マヤ・さうさ。ぐくぐくと能なりぞく。

兄あにさん能なり沈しずんで温あたたまアいよく沈しずむと金魚きんぎょや緋鯉ひぎ。

飛と出でるともく啼なくと水虎みづこが出でますとこころる。らやく。

水虎みづこ出でるな雀すずめへ利根者りこんごころ啼なませぬ。うさう移うつる。

あつても弱虫よわむしどマア移うつるよ兄あにさんも強つよい。耳みみの服はき。

小水こみづのちの溜たまりらぬ中なかうふ。アといと目め移うつるてま。ソテ鼻はな。

の下したのお掃除そうじをして虫むしの食たけ移うつるや。能なりみなる。

さぞして他ほか本ほんのおぢさんがお誓ちかい。お舌しほをべろくマレ能なり。

子<sup>こ</sup>ふちう<sup>ちう</sup>こそぞ<sup>ぞ</sup>ホイ<sup>ホイ</sup>くお<sup>くお</sup>咳<sup>せき</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>悪<sup>あく</sup>い<sup>い</sup>おと<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>ざん<sup>ざん</sup>ご<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>り  
 か<sup>か</sup>舌<sup>しつ</sup>を<sup>を</sup>洗<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>ろ<sup>ろ</sup>腹<sup>はら</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>へ<sup>へ</sup>灸<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>灸<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>誰<sup>だれ</sup>  
 ま<sup>ま</sup>え<sup>え</sup>さ<sup>さ</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ア<sup>ア</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>ッ<sup>ッ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ア<sup>ア</sup>。い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>母<sup>はは</sup>や<sup>や</sup>ご<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>て  
 中<sup>ちゆう</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>可<sup>か</sup>老<sup>らう</sup>坊<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>灸<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ア<sup>ア</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>ウ<sup>ウ</sup>一<sup>一</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>母<sup>はは</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>  
 ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>ざ<sup>ざ</sup>ん<sup>ん</sup>モ<sup>モ</sup>ウ<sup>ウ</sup>出<sup>で</sup>う<sup>う</sup>一<sup>一</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>く<sup>く</sup>モ<sup>モ</sup>ツ<sup>ツ</sup>温<sup>あつ</sup>て<sup>て</sup>一<sup>一</sup>そ  
 ち<sup>ち</sup>でも<sup>でも</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>移<sup>うつ</sup>入<sup>り</sup>の<sup>の</sup>狐<sup>きつね</sup>一<sup>一</sup>土<sup>つち</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>移<sup>うつ</sup>入<sup>り</sup>雀<sup>すずめ</sup>ハ<sup>ハ</sup>是<sup>こゝ</sup>を<sup>を</sup>ど<sup>ど</sup>あ<sup>あ</sup>と  
 ち<sup>ち</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>サ<sup>サ</sup>ア<sup>ア</sup>兄<sup>あに</sup>さん<sup>さん</sup>も<sup>も</sup>雀<sup>すずめ</sup>も<sup>も</sup>哥<sup>うた</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ひ<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>月<sup>つき</sup>さ<sup>さ</sup>る  
 い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>一</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>や<sup>や</sup>一<sup>一</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>年<sup>とし</sup>已<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ア<sup>ア</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>  
 若<sup>わか</sup>





味  
「たのこ強て」あろちろ向ちやアドド  
「ころちろもドド」

「ア後ろちろ向ちやアどどん」  
「ホイさろろアどん」

どんよサアあぐりまあよハイ出まきりのみどもくあろろアガ

待てあろどらろぞお芋餅何でも能子あふろろこ所袋

美お待くして居るどらろマレ能子あふろろこアリや初が

お浴衣を持てか迎ひおまこぞ「たろもべ」  
「アバ」  
「サア

初マあげろぞよマレ能子あふろろこぞ  
「上ろあてろ医考とらん」  
「きよとろを」

隠居どろどろとナ相ろろぞ碁でどぞらろ伊勢十の

主人しゆじん油あぶら八やちの太た郎らう兵べい衛ゑいする者もの。おのごくご出で會かいうす。阿あ謂い暮ぼ

敵たきする者ものであらうとて。ハツハツト人ひとをあざむくやうな笑わらひで口くちをたて

け頃ころハ親類ちんれいどもに病人びやうじんがござらうとて。家内けいだいの者ものが代かひりてよよ夜よ

伽かふとあるのの。イマ何なんのうのと取とり終しまれて碁ごも出でてませぬて

夫それへうらうへ。ハテさて夫それハ氣きの毒どく母はは千せん万まんトキニ病体びやうたいハ一いっ兎と角かく食じき

物ものが納おさまると煮ゆまうとて。食たると尾び篋けつまぐら吐なまさる。此この節せつハ

まさしく重おもいとまさきをうらうとて。ハア誰たれふあうけうけるささうと

仲な景かげさるるを二ふた廻まりて驗げんが見みえませぬらう。孫そん邊へん。

中ちゆうへへ願ねがひ申まをす。只ただ今いまでで丹たん溪せきささるるででどどづづららままとと「何なにと見み立た」

たたナナ「ままづづどどももここののおお見み立たもも膈くわく症せうどどややとと仰おほせせらられれままとと「膈くわく症せうで

るるへへナナニニ支しぐぐ膈くわく症せうままづづ物ものをを食ありりとと吐とききのの瓜くわ膈くわくとといいふふのの俗ぞく物ぶつ

もも當あて推ま量いふふららふふテテナナ膈くわく噎えん番ばん胃いるる者ものハハななららくく又また大おほ小こ異いるる

ののどどてて何なにととくくああのの男おとこ等らがが小せう量りやうでで何なにががああららるるののららいいののららいい

既すでにに医い書しよとといいふふ内うちのの外け臺たい千せん金ごん方ほうとといいふふのの説せつののれれがが何なにとといいふ

支しががああるるてて何なにアア何なにででららううままとと息いきハハ我が鳥か棒ぼうにに似にてて飛とべべでで散さん

乱らんしし人ひとハハ膈くわく症せうとといいふふ達たつてて俳はい諧かいとといいふふととああるるままとといいふふてて病びやう人にんのの息いきハ

我が棒ぼうとらふて、関羽張飛かんうていが持もと棒ぼうを吞のどやうなるので息いきが

せうくとりたゞうゝのりのでござるうゝ。鬼角飛おにかくとで散乱さんらんと

がる。此この膈症かくしやうなる者ものハ所謂しゆい俳諧はいかいなるは好このむ人ひとふある病やまひと

どござるて、人ひとの膈症かくしやうあして達たて俳諧はいかいと人ひとが止やりくとの程ほど

達たて俳諧はいかいとる者ものなるは生なまむる病やまとて「あつちどさやう

あつちなるは俳諧はいかいが好このまてこまのりまゝとる「イヤそれゆ一いち寸すん哥仙かせん

ぐらゐいよたれど五十負ごじゅうひ百負ひゃくひなごくらると留負りゅうひで又また業わざを

なとてそれ見みえど俳諧はいかいが好このまて見みむとも其その通とほり見脈けんみやく

病を指さしけ方へ回すを久で病を察するゆき。ハツハツ  
 去嫌がある食物をお氣成はけらぬ其膈噎翻胃不似  
 て非なる者を鶉飼の症といふ是もぬつち物を食てこと  
 小吐くゆのでとむそくハ鶉飼の症でござらう。難治の症  
 でござらうあの男等ハ七先より口先が切者で病家の俗物を  
 とくく新渡の唐本あり点がるて讀みぬハ唐人もをる  
 びと杜撰が多いるどくハ傍くモ丹溪さる鶉卵を食  
 らとヤマとら致しませらとらられてアアなる程鶉卵

かろうしくあひ。あうくたぐふと思ふ。あひる卵をふくが能いな

どくろのはのやうなまをりふ男どもどく。ハツハツ。歎くいふぞて。

ハツハツイマ。チトお出なさい。い問ハ腰ころしふ鞠を物とていふも。好

謂蹴鞠するりの成通卿不どの高手あゆるし終ど踏つぎを

まづも大さく腰ころしふ能てチトお出なさい。ドウが番頭所

謂主管する者も大役ぞてチ。ハツハツ。ア。今日ハどらうく人

今日ハ芥子園が書画會う。顧炎武が所へゆつて。山谷ら

詩會へゆつるが東坡や放翁う代作をたのむまどらう。兎角

隙<sup>ひま</sup>ほごうが多くて病家の小言<sup>こごと</sup>を聞<sup>き</sup>てあつぬ是<sup>これ</sup>で医者<sup>いしや</sup>が

流行<sup>はやり</sup>するたすぬ。イマ志<sup>し</sup>くく<sup>く</sup>ぶ。ハツハツトゆかををえ。▲ハ美とりの男あつぬ。くろがウくとゆげを

とてしおやぐいを下ふびのうらりふ。▲松ちくとり男古風ふめんどりのさぐりをあひま。をさんで志せあむむぬぬ丸くしてあこま。

ちき<sup>ちき</sup>八<sup>やち</sup>き<sup>き</sup>流さんし見<sup>み</sup>るま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>深<sup>ふか</sup>い<sup>い</sup>笠<sup>かさ</sup>を<sup>を</sup>あつ<sup>あつ</sup>て障<sup>さやう</sup>さう<sup>う</sup>ひ<sup>ひ</sup>け

さうな羽織<sup>はおり</sup>を着<sup>き</sup>てあつ<sup>あつ</sup>てに<sup>に</sup>ぐく<sup>く</sup>い<sup>い</sup>あれ<sup>れ</sup>が三十箇<sup>うしよ</sup>所の

地主<sup>ぢやう</sup>さぬの果<sup>は</sup>ご<sup>ご</sup>ア<sup>あ</sup>角<sup>かど</sup>の<sup>の</sup>ご<sup>ご</sup>ら<sup>ら</sup>子<sup>こ</sup>さ<sup>さ</sup>痛<sup>いた</sup>う<sup>う</sup>さ<sup>さ</sup>もの<sup>もの</sup>い<sup>い</sup>

い子<sup>こ</sup>心<sup>こころ</sup>がけ<sup>げ</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>いと皆<sup>みな</sup>あの通<sup>とほ</sup>ア<sup>あ</sup>ご<sup>ご</sup>ハ<sup>は</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>。天<sup>てん</sup>王<sup>のう</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ

ハ<sup>は</sup>トリ<sup>り</sup>子<sup>こ</sup>形<sup>かた</sup>ご<sup>ご</sup>子<sup>こ</sup>あ<sup>あ</sup>の内<sup>うち</sup>親<sup>おや</sup>父<sup>ちち</sup>ハ<sup>は</sup>伊<sup>い</sup>勢<sup>せ</sup>カ<sup>か</sup>ラ<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>て<sup>て</sup>来<sup>き</sup>て<sup>て</sup>一<sup>ひと</sup>代<sup>だい</sup>子<sup>こ</sup>位<sup>ゐ</sup>上<sup>じやう</sup>

と人さ其代利勘どるんで人も奢てふゆるぬまふの大分

魚がえんえんろろ。チト驕つて奉公人不食りせうとらふ不が

大きま四不鯉の酢煎ろろ五匹をりり。尾頭をろろて鯉が

小笠原流でトろろかろて居るり。ことをろろろろろろ買て

焼て置て自身ふあとの朝らげを提て河岸へ行き

まも河岸中をろろとつても直ら出来ぬろろ土大根の

折を買て来て。そのふの焼とをろろを一匹づつ入きて

輪切大根の煮付。丈夫が惣菜大勢下女をろろろろあつても



菜あふせハ婆おばさるゆが出てまんべんきく盛ゆワさと命いのちするゆハ彼かのをぶ  
 をむアあくくとあさるうううして中ちゆうまがう魚さかなとらふゆのハ頭あたまふう  
 ままがあるゆのごとらふうう。四五十人の千代子供ていごが無な據と首くびうう  
 食たハ終しまぶるゆぬ。物ものが廢ふらぬ。年とし中ちゆう朝あさが茶ちや粥がくで昼ひるが汁じゆ  
 ちう。夜よ食しょくハ澤さわ菴あんそれゆ塩しほのあさ辛からハ中ちゆうぶぶうう。二切ふたきりで湯ゆ  
 までの菜あふせふるう。々々ゆの佛ほとけの日ひごとらふ不ふが八はち盃はい豆腐とうふが平ひらの中ちゆう  
 をゆるくと游あそびで居いる中ちゆうぶぶさ。鯉こい節せつのたのむけハ夷あま講かうと生なま辰ぢん  
 ちう。三さん度どの飯いひの外ほかハ食たふゆゆのハ冷ひや飯いひを干かくと猪ちゆうの塩しほうう。

其その中なかへ田い舎まく貫かく味あじ噌そ豆まめををいれこるまが豆まめのあ數かずハハ鉦かね

太お鼓とで探さがと程ほどどアアあありり其その豆まめのあ外ほかハハ自みづか作ずの醴あまみよ婆たば

ささるるが上かみ総そう産さんどどろろ薩さつ戸とりりふ茶ちやのあ移うつをを拵こしらるる

其その外ほかふ奢あがり者ものととりりふふささるるををりりちちりり先せん祖ぞささるるをを大お切きややて

出で入いりのあ者ものふ目めををめめけけててややららくくくく身み体ていハハよよくくちちるる苦く

金かねがが子こをを産えんでで家か賃ぢやうがが流なが込こむむ商あきでで設たてるる暫せん時じのあ内うち

ふ大お造さうるる物ものふふろろくく一いっちちちちるるちちどど私わが等らがが親おや父ぢのあ咄おとをを聞き

ふふままづづ酒さけハハ夷えい講かうををくくでで常つね不ふ客きやくのあ有ありり時ときハハ蕎そば麥あ二にツつをを

鼻の先へあいて、サアくお辞儀するおよんあさといふおが  
たろこ二つごろう客も二つ食つて立つ。そのあとで婆どあマ。  
さくぶ相伴しゆせう。こるものまのれと半分づく食とある  
ご丈夫やア金もたまるをぶさ子へまが、一冥利が能い  
ころ。僅三十年の間、地面が三十二三箇所土藏が三十  
穴藏が二十五六出入の人数くつひけてゐ、支も大造り  
へそれをたろこ二三年で潰し、ま下中うらさく、ま早の  
物一文の錢もあごあろそらあ、設アまやぬ、あま入がごあ

お若い<sup>若</sup>い<sup>が</sup>銭<sup>は</sup>は<sup>は</sup>い<sup>る</sup>い<sup>る</sup>さ<sup>る</sup>る<sup>な</sup>。金<sup>四</sup>討<sup>が</sup>あ<sup>る</sup>る<sup>な</sup>。ナ<sup>ア</sup>番<sup>頭</sup>は<sup>番</sup>頭<sup>は</sup>番<sup>頭</sup>  
 も<sup>だ</sup>ま<sup>う</sup>く<sup>く</sup>と<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>。株<sup>でも</sup>買<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>ハ<sup>イ</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>汁</sup>の<sup>実</sup>  
 不<sup>買</sup>こ<sup>を</sup>く<sup>ら</sup>う<sup>も</sup>銭<sup>金</sup>と<sup>ら</sup>ふ<sup>か</sup>ら<sup>ん</sup>た<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>せ<sup>ぬ</sup>ハ<sup>イ</sup>マ<sup>く</sup>  
 至<sup>つ</sup>て<sup>溜</sup>能<sup>り</sup>の<sup>ご</sup>心<sup>が</sup>け<sup>が</sup>悪<sup>い</sup>く<sup>溜</sup>ら<sup>ぬ</sup>あ<sup>り</sup>ぐ<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>  
 御<sup>江</sup>戸<sup>不</sup>居<sup>て</sup>金<sup>の</sup>た<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>又</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>ら<sup>銭</sup>も<sup>金</sup>も<sup>一</sup>  
 所<sup>不</sup>佳<sup>あり</sup>ぐ<sup>さ</sup>い<sup>不</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>て<sup>諸</sup>国<sup>の</sup>人<sup>ぐ</sup>ら<sup>比</sup>白<sup>出</sup>て  
 来<sup>て</sup>出<sup>世</sup>こ<sup>ら</sup>る<sup>で</sup>ら<sup>る</sup>い<sup>ら</sup>番<sup>頭</sup>も<sup>金</sup>を<sup>持</sup>ぬ<sup>氣</sup>さ<sup>る</sup>国<sup>不</sup>  
 居<sup>て</sup>て<sup>飯</sup>を<sup>食</sup>て<sup>冷</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>居<sup>る</sup>ご<sup>ら</sup>う<sup>が</sup>ナ<sup>ア</sup>下<sup>ご</sup>ら<sup>う</sup>ご

一言もあるまの「コ」ハあやまりまゝと「志」見所があるテ。

此番頭ハたのりハ綿の厚い着物が嫌で身ハゆるぬ貴さ

まの着物も薄綿ふるまゝと夫限ごとと名りるぢやいハ兵衛さ

んも今でんか、さん一人ごころ随分孝行しまゝハ世話をや

とせまゝなる唐の何とらの唐人の寒の内ハ笥を掘らう

と考へて金の金を掘出しこととさへあるハ「私」どもが孝

行ハ金の金を掘ねらう唐銅の金を捨て来る醜でも吞

せらうとあなまさ子「夫」でも能のさ今うのどろろがそれ程ま

身上しんじやうを受うゑてああののささるるへへ不ふ孝かうのの四し討たうどどナナガガはは親しん父ふのの葬まうらひかかふ

焼やき香かうををままんんばば。役やく者者ののまま終しゆうををししてて上かみ下しもででああるるああららく

現げん在ざい親おやのの別わかれれ哀あはれのの情なさけががアアンンええぬぬ奴やつどどううろろくくででああるるままい

ととろろふふとと案あん事じののどどくくどど。ママレレ藝げい者者ののソソレレちちののここりりちちののママ何なんどどへ

くくごごららととささめめぐぐのの者ものをを内うちへへええ迎むかひひててどどろろひひくくとと騒さわぐぐやや茶ちや

屋やどどのの女め郎らう屋やどどののままどどろろここののままどどろろとと内うち外そとのの物もの入いららぐ

強つよくくああるる。仲な間まのの取と遣やいいああぐぐろろりり大だい明めい神しんはは親しん父ふのの身みの

脂あぶらををととろろくくああるるししててままああららここ。そそののくくせせ高たか慢まん不ふ人ひとをを見み

くゞくゞと。文盲ぶんぼうぶら。俗物うそぶつと云々云て茶磨ちやま藝ぎを鼻はな、

かけたらる。茶坐敷ちやざしきをうも何度なんど拵ぢとらとぬりさあれがらん

の豊後ぶんごよこの豊後ぶんごあつとどとやとと。兎角とくかく人ひとハ身みの用心ようしんく

トイ田舎出いなかの下男げなんぢうのうへあきを  
ゆぐ はらうりておまじがけをうへをばて 三助「モ、金を拵こまへ云て山やま更まハ

悪あくいゝぢうこく。国くに居ゐことと珍ちん更まとらうらうら更まが有あけエえ。

でエ。何なん云いうま己おのれ方かたで暮く者もの積つみと云いまさ江戸えどでも山やまの芋いもさ

三助「モ、夫つまで具ぐ暮く者もの積つみりが鯉こいらうとどし「ハテ三助「めらうとも三助五ご躰たい

拵ぢてでも移うつく半はん多たう暮く者もの積つみで半はん多たう鯉こいらうとどし「ア、そこでハテ

獵師リョウシ 夫ソノ見ミてトろろニなるルげニさレだア。何ナニでもモ山ヤマ神ノカミどノくク崇トクアリ。

蟒蛇ウツクシどノろロへヘ。蟒蛇ウツクシのノ化カ移シくク不フがガ魔マ性セイのノ物モノ不フ遠エン移シくク亦モ殺コロ。

さレアア手テ由ヨ移シエエ更シどノろロ。臨リン終シュウ一イツ移シくクとト晴ハルるルヤヤ氣キ味ミ悪アクいイとト何ナニがガ。

村ムラ内ウチ亦モ寄ヨりリてテ評ヒヤク定テイのノ考カウこコ不フがガモノ。曾ソノ根ネ村ムラのノ松マツ之ノ丞シヨウ屋ヤ。

ちチふフ人ヒトのノ神カミ功コウ皇クワン后コウさレるルのノ時トキ多タくク代タテ々々續ツくク傳デン識シどノアア。けケ世セ。

開ヒラ闢クくクのノ更シをヲ何ナニでもモあリくク移シくクちチふフのノ移シくク人ヒトどノアア。

ハハアア松マツ之ノ丞シヨウどノのノ鳳ホウ首ウのノうウ亦モ傾カガてテまマどドいイまマくクえエんンてテ居イっッけケエエ。

ササアアたタまマんン移シくク考カウこコアア。是コノ鰻ウナギどノとト鰻ウナギがガまマちチらラくクくク生ナマ神カミ屋ヤ。



離れて代々住居の〜〜此村内に住移るはもあれ暮積

鯉ふる〜〜。モ、鯉が暮積ふる〜〜。二つ二つの内は

お祢宜どの〜占も市女の笹を〜移る鯉どア。

鱗地で移る。モ、夫どけども雀海中入て蛤とるるちよ

るア書物もあるが暮積が鯉化とる〜庭訓の徒業

今川了俊其外雜書も年代記も又あ〜移る

る〜と云け上。何が〜山師ちよ者ア。何耳どア〜早く

聞付るり〜ア。けるを〜知て直ハア熟談の〜

不とこが小判にせん二十両ごア其そのの亦また兩りやうと村内むらうちへ割付わりつけて濁酒にごり酒ごアの

居ゐびごり餅もちごアののあんででもハ三日さんじつ正月しょうげつで候いひけエおの

山師やまぢごのごテ何なにがなや今度こんど觀物くわんぶつの太夫たゆうごのご云いて四角しやうかく

箱はこと入いて開帳場けいぢやうばの大金おほなげんりりけけととああるる普ふ

請しんののととサテ始はじめるるとと不ふがサテとももああんんななままががああるる

りんりんごごとといいママ腰筋こしぢんよよるるととモモ半はんをを鯉こいご

ととああるるとと暮くれ積つみめめがが普日ふじつ請しん中ちゆうの日ひ數かずとと内うちふふ暮くれ積つみの

形かたちががああららるるとと皆みなハハ鯉こいふふるるととままああるるととアア半はんがが









上之卷五葉  
北川美九画集



「豆腐」  
「蒲」ア焼へ能かむ  
「瀬戸物」焼継り

「はぎふ」こざうません  
「ナイ」中たつきよ  
「おし」が不の水瓶を

「たの」こく  
「ヘ」中たつきよ

日且時の光景

「あろ」のトシ  
中たつき  
「トシ」くろ  
「あろ」いぞ  
「ろ」なる  
「水」み

「るぞ」湯が  
「ト」とち  
「ナイ」トとち  
「桶」を  
「セ」み  
「か」さ  
「さ」ぢ  
「の」ま  
「の」と  
「足」を  
「で」く  
「ま」せ  
「な」が

「コ」若  
「イ」衆  
「ま」が  
「を」能  
「く」洗  
「ろ」せ  
「ん」老  
「人」の  
「あ」ぶ  
「ね」ん  
「ま」ぶ  
「で」



さうございませい小桶こぶけをさうございませい通とほアとちが終人アレ  
 水舟みづぶねの水みづが溢あふるによ誰たれごう糠袋ぬかぶくろをあけさあのござるい  
 つけぞんざいなるよ高茶かうぢを足の裏あしうらへ踏ふ付けさアとちが終人  
 へッ。痰たんを吐き中ちゆう。瘡蓋かさを落おと中ちゆう。へッ。イヤハマ坊らちらへ  
 終人しゆうじんぞん妙法蓮華經みょうほうれんげきぎやうトガくろロマあびさしい尻しりどアイ  
 免めんなさい。コレあめんがさへ悪わるいする。口くちめとを塞ふへ居ゐどと  
 中ちゆうへ這入へあるせく終しゆうう這入へある。がちうね。ア其そんの尻しり不腰ふこし  
 を掛かてをうり居ゐちやアどうもちうね。アイ老人らうじんでござい

マ是ハ能湯ゆどい湯ゆをぬるいとらふ人の鉄炮てつぱうの方かたへ沈しづる。

け格子こうしををるぐらで鑊くまの中なかへ入いるが能ゆやくけらうく。

アちえんちゆうちゆうねんげきちゆうへ清盛せいせいさるひ火ひの病かまひにちえん。

コウぢいさん鉄炮てつぱうへ沈しづむと附馬つうまがうるせりるちりちり熱あつうア。

香かの物ものを一切いっさい入いてりねり終おひりマ湧ゆて来きるぞころう

てねぶア虱ししの食くらと穴あなちりて能塩梅ねんえんばいぞも體中たいちゆうへ一粒ひとつぶ

鹿かの子この紋もんが付つく虱ししもまんざらどヤア終おひりて去さるぶより

くろ小挑灯こてうちん伊吾いごよくとちえんでもえんぞが可愛かひより松まつハ

ちれと移うつササ。ちろろと移うつさきよよく。たと山やま

中な三軒家さんけんけでも。主ぬしと二人ふたりでくくさささららくく畜生ちくせいめめ。ととり

のたたいいせせららををううちちててくくままやや。アアててどどももいいままじじいいつつささらら。

「テテココテテトトトト」  
てこくてんてん  
ううんんおおんんをを「ヲヲイイちちぶぶくくふふ」移うつ入いれ三味線さんまいせんをを移うつ

ららアア「アイアイ成な免めん移うつ」ワワリリママ出でままままくく。ブブーーままじじたたままととままゆゆくく

ままささらら「大おほききささるる罨うん丸まるととせせ入いれ天窓あまのまどとと鉢合はちあわせををくくてて罨うん丸まるがが

宙ちゆうをを飛と行んぎやうととアア。ととんんどど人ひと魂たまどど「吉きちママ。ああささららくく。罨うん丸まるとと

ううんんああママ合馬あひまアアちちるるりり入いれ尻しつぽくく銀ぎんでで禪ぜんををかかけけママナナ

「うらア後之飛車とはぶれて角の通アぞかきマアがれ

ダイ出<sup>で</sup>かき田舎者<sup>いまりめ</sup>く▲  
西国の方より来りて江戸へ出て銭湯の勝  
手を考へてございませうとにらりておろし

「是ア憚<sup>たへ</sup>ある湯も汲<sup>くみ</sup>て手拭<sup>てんぎ</sup>

まで添<sup>そ</sup>へてさるるもあきんをい<sup>い</sup>ト  
おのれがてぬぐひはきり  
てあきんをい

湯の中うらうらあびてくさをあひなごう  
この湯の臭い

湯へく臭<sup>くさ</sup>るは是<sup>こゝ</sup>何<sup>なに</sup>らと物<sup>もの</sup>へ人<sup>ひと</sup>ども遣<sup>つ</sup>ふ

と<sup>あ</sup>けでも有<sup>あ</sup>りけ<sup>け</sup>まア油<sup>あぶら</sup>の浮<sup>う</sup>るち<sup>ち</sup>うのさ<sup>さ</sup>をい<sup>い</sup>て

さるる鯨<sup>くじら</sup>ども洗<sup>あら</sup>さ<sup>さ</sup>け<sup>け</sup>どももの如<sup>ごと</sup>あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>へ奇<sup>き</sup>妙<sup>まう</sup>なる白<sup>しろ</sup>い





ちいふいぢまへソリマ何さんとのトやい早うおとしと其體

雪きりぐんせ勿かた体たいあへトときりて西國にしこくの道みち理り油あぶらををらうととち

りうとテ今一時いまひとときると比ひ自みづか洗せん出でりてののるる不ふわわへへッッ

是是これこれ臭におうるる思おもひ出でささとののささんんををへへののささんんををへへトトちち

の中なかへ下した帯おびををままぎぎここんん「アア」」的てきりりももるるのの癡ち呆呆ややソリマ

モウ私わがが洗あらううささううややららうう能よかかととここ又またででりりけけ

幸さいトトややちちううココリリママココレレああんんどどここ又またででりりここのの幸さいととかかららうう

ついでしてさびし口くち合あななららいい

8N-3

"N4"

Sh. 34

1

9806

4

9780

国立国語研究所



1001129780